エッセイ

万葉集と寅さん映画

田中　祐二　関西の映画＆阪神タイガースファン

私は一昨年の４月に某大学のシニア専修コースに入学し、日本古代文学の講座を１年間受講致しました。前半は古事記、後半は万葉集を親しむ内容でしたが、特に万葉集の授業がとても面白く、収められている和歌にすっかり夢中になってしまいました。

万葉集の和歌は、自然の景色に対する感動、美しい人を見ての恋愛感情、死んだ家族への悲嘆、一人赴任する心細さなど時代を超えて共感するものばかり！

プロの歌人以外の無名な素人が素直に詠んだ歌も多く、親しめば親しむほどとても心を捉えられました。万葉集に親しむ事によって、日本人の心根が理解できたような気がしております。

私はおおらかで人生の快楽を謳歌する歌が好きなので、個人的に大変気に入っている歌は、「令和」で有名になった大伴旅人の次の２首です。

１.「生ける者　つひにも死ぬるものにあれば　この世なる間はたのしくをあらな」（生きている者も最後は必ず死ぬのだから、せめてこの世にいる間は楽しくいたいものだ。）

２.「験（しるし）なき　物を思わずは一杯（ひとつき）の　濁れる酒を飲むべくあるらし」（くよくよと甲斐のない物思いに耽るよりは、一杯の濁り酒を飲む方がよいらしい。）

私は寅さん映画が大好きで、『男はつらいよ』シリーズ全４８作品（実質）は勿論全て鑑賞済みです。高校時代の第１２作『私の寅さん』（１９７３年）からは、封切り時の松竹系映画館で観ております。大学時代に、彼女をデートで寅さん映画に誘いましたら、とてもドン引きされ、その後見事にフラれました。（寅さんと全く同じ運命でした！）

ちなみに私の『男はつらいよ』シリーズのベスト５は次の通りです。

第１位　第３８作『知床慕情』（１９８７年）
第２位　第３２作『口笛を吹く寅次郎』（１９８３年）
第３位　第２９作『寅次郎　あじさいの恋』（１９８２年）
第４位　第１５作『寅次郎相合傘』（１９７５年）
第５位　第１７作『寅次郎夕焼け小焼け』（１９７６年）

シニア専修コースで万葉集に親しむことによって、なぜ寅さん映画がこんなに日本人に好かれるのか、改めて認識致しました。

寅さん映画の人気の要素ですが、まず挙げたいのが私たちの「自由人への憧れ」にあると思っています。当時、組織のルール・人間関係のしがらみに悩んでいる会社勤め人の一人であった私にとって、寅さんの生き方がとても羨ましく感じましたし、同じように思われた方が多かったような気がします。

そして「マドンナへの恋愛感情」です。好きな人ができたばかりの時は、相手のことを思うだけで幸せを感じられるものです。しかし一方通行のままの状況が続くとだんだん苦しくなってくる・・・寅さんが大変面白可笑しく表現するので、それが私たちをホッコリさせてくれます。

また寅さんは「人と人との絆」を大切にします。日本人の美点である義理・人情の世界を思い起こさせてくれます。

最後は「故郷への郷愁」です。寅さんには、さくらやおいちゃん、おばちゃんが待っている故郷があります。単身赴任等で家族と離れている人々にとって、故郷・家族の有難さを感じさせてくれる映画です。

こうしてみると寅さん映画の人気要素がすべて万葉集の和歌と重なっているのがわかります。

やはり万葉集に流れている日本人の心根がしっかりと反映されているから、寅さん映画はいつまでも日本人に愛される作品となっているのではないでしょうか。

映画館について考える

水野圭次郎　むぎのえいが部

先日、雨の飛騨高山で半日空いてしまい、映画でも見ようとスマホで映画館を検索すると、飛騨地方では２０１４年に高山旭座が閉館して以来、映画館が無いことが分かった。一番近い映画館はお隣の富山県のＴＯＨＯシネマズで高速を使って１時間半近くかかるそうだ。２０１６年８月に飛騨地方がモデルになった新海誠監督のアニメ映画「君の名は。」が公開され大ヒットした。しかし、ふるさとが舞台となった飛騨市でその映画を見ることできず、地元民から悲鳴が上がった。最終的には飛騨市文化交流センターで３回上映されることになり、冒頭で新海監督の「映画館がないとは知りませんでした。今日は皆さんに見てもらえて

うれしいです」というビデオメッセージが紹介されたそうである。

さて、コロナ禍で多くの映画館が休館を余儀なくされ、その代わりにネットフリックスやアマゾンプライムビデオなどの映画配信を家庭のテレビやタブレット、スマホなどで楽しむ人が大幅に増えた。画面が小さく、音声や画質は映画館に及ばないものの、レンタル店にわざわざ借りに行くこともなく、気軽に楽しめるのは大きな強みである。昨今、映画館上映がなく、ネット配信限定の映画がカンヌ映画祭やアカデミー賞に出品され、受賞した作品まである

今や映画は映画館で観るものという常識が無くなってしまった。

ここ２０年の日本の映画館を見てみると、一つの施設に複数のスクリーンがあるシネマコンプレックスが主流になり、飲食やグッズ販売で大きな収入を上げている。また、差別化を図るため多額の投資をしてＩＭＡＸ、４ＤＸ、３Ｄなどを導入するシネコンが増え、その一方で一般館は数を減らしている。

２０２０年６月の統計を見ると、全国には３５８３のスクリーンがあり、デジタル設備を備えているところは３５１８、そのうちシネコンは３１６５（８８．３％）、一般館は４１８。大手シネコンの中ではイオンシネマが９２館と最多で全国の殆どの県を網羅している。次いでＴＯＨＯシネマズ６８館、ユナイテッド・シネマ４８館、ＭＯＶＩＸ２５館、１０９シネマズとＴＩＪＯＹがそれぞれ１９館と続いている。

シネコンで公開されるのは商業主義な娯楽映画が中心だが、ミニシアターで公開されるのは芸術性が高い映画や世界中の様々な映画である。ミニシアターの中でも知恵を絞ってカフェやレストラン、ブックストアなどを併設したり、演劇やライブを上演するなどして文化の発信基地として成功しているところもある。ワクワクするような仕掛けをうまく作ればまだまだ一定の集客を見込めるのかもしれない。

家の中で一人で見るだけではなく、他人と同じ空間・時間を共有して映画が見られる映画館が無くならないで欲しい。コロナ下で厳しい時代に直面しているが今後に期待する。

書評

林久登著　「続　私が選んだ日本映画１００本」

吉村英夫　映画評論家

志賀直哉の価値判断は、「快」と「不快」だとされる。好ましいと感じるか、イヤだと思うかのどちらかしかない。中間はほとんどない二分法である。だが論理性のない志賀的判断を読者が是認し、文学史家が追認した。志賀の感性的判断が鋭く、普遍性をもっていたということでもあろう。そして志賀の文学的位置は定まった。

ここまで書いてきた文の「志賀直哉」を「林久登」に置き換えたら、林の書く映画評への私の感想の過半を言ったことになる。林は既成の判断にとらわれない。誰がどう見るかはおかまいなし。百万人といえどもわれ行かん。林の見方はユニークであり、快く胸に納めることができる。林は「映画監督藤田敏八　パキさんとその仲間たち」（二〇一二　編集プロダクション映芸）でもこの調子を貫いて敏八研究のパイオニアに躍（おど）り出た。

映画評（論）に限らずだが、普通は頭のなかでこねまわし、論理性の有無も再点検し、それなりに他人様が理解できるか納得するかを念頭に置き、やっと署名をして発表するのが常道だろう。だが林は、そんなまどろっこしいのは潔（いさぎよ）しとしない。志賀流なのである。

以上が、こんどの「続日本映画１００本」を読むまでの、林の映画にかかわる文章についての感想であった。あえて「あった」と書く。いや、本著も原則的に林流は変わっていない。だが「続」を読み進むなかで、林の書いている映画の論評が快く私に響いてこない部分があることに気づいた。林の選んだ作品のうち、私は、３分の１くらいは観ている。それが多いか少ないかは私にはわからないが、林の☆印の数と私のそれとの差異が少し気になりだしたのである。林が満点の☆４つをつけているなかで、私が首肯できるのは、『淵に立つ』『焼き肉ドラゴン』だけなのだ。『淵に立つ』は不条理ドラマであり、論理を気にする私らしくもなく気にいった作品である。私自身は、映画が、時代と社会、あるいは歴史にいかに向き合っているか、ドラマとし

ての論理的骨格をいかに堅持しているか、作り手のオリジナルな個性をいかに映像として結実させているか、そして情感も大事にしているか、そのあたりを大体の基準としている。だが、私のような価値観はもう古いという自覚もある。既成の定義や価値観がまずあって、それに当てはまるかどうかというのは、若い映画作家にとっては「打ち砕くべき映画観」なのかもしれない。だが林は、そのあたりが直感的にわかっている。私は林とほとんど同世代なのに、私は「一九五〇年代映画芸術黄金期」などという既成の映画史観から解放されていない。そこに私は「違和」を感じるのだろう。だが林はそのような既成の価値観、すなわち呪縛からは自由である。それでよい。それでこそ現代と対峙する映画（作家）と真正面から向き合うことができる。

林的感性で映画を見ることを支持しつつも、林に欠落しているのは、現代日本映画を歴史としてどう組み立てるかという視点である。たとえば林の好きなベテランの平山秀幸、岩井俊二、是枝裕和たち、２０１０代からの瀬々敬久、大森立嗣たち、それに故人となった藤田敏八、黒木和雄などを、映画史のなかでどう組み立てて繋げるのか、どこで連結し、どこで切れているのか、そのあたりの考察がほしい。ここまで新世紀の映画にのめりこんだのなら、映画史的観点を持つべき時にきていると思う。そのあたりの考察が加わるなら、林久登は二一世紀日本映画史に挑戦できるのではないか。「１００本　第３集」が、映画史の観点を踏まえた林流の奔放な集大成になることを期待したい。ぜひ生き抜いて取り組んでほしい、まだ映画を観るという気力では青年なのだから。

もうひとつ。この「続１００本」のなかで、次のようなところが眼にとまった。「高齢者を相手に横行する卑劣極まりないオレオレ詐欺。バレバレの嘘を平気で通す厚顔無恥な権力者たち。そんな殺伐とした景色を日頃見ていると、時代に翻弄され、貧しいながらも、嘘をつかず本音で笑って泣いて生きた家族が何と輝いて見えるのだろう。泥臭いがそんな世界を圧倒的な映像で見せてくれる」『焼肉ドラゴン』。「ここ数年の国際情勢は混沌とし、国内でも不穏な空気が流れている。この映画の中で、女優の大橋芳枝が生前父から常々言われたという言葉が強く印象に残った。〈戦争で死ぬな！　死ぬなら反対して死ね〉」『誰がために憲法は

ある』等々。

娯楽的芸術としての映画は、ハリウッドもだが日本映画も、時として社会の矛盾をえぐり出し告発して、既成の価値観や社会的不正義と対峙してきた伝統をもつ。林も反骨精神をもつ作品を評価する傾向は見受けられる。志賀直哉は、保守的な感性をもちつつも小林多喜二を擁護した。政治的立場などとは無縁でも志賀は不正義にはノーと言った。私は林と「安保法制反対」デモで一緒に街に出たことがある。彼も私も十年単位で遠ざかっていた「政治的」行動だったはずである。林は「カミさんが、このデモにだけは参加すべしというので」と照れていたが、林は職場の組合の委員長もしたことがあるという。現代は「不快」な傾向が増している世の中である。その不快を「不快」と言い切れる情と知を大事にして映画と対峙していってほしいと念じる。

（付記）三月一日「中日新聞（夕刊）」の「中部の文芸（小説・評論）」欄冒頭に本著を評している一文を見つけた。「林久登の私家版「続私が選んだ日本映画１００本」には圧倒される。切れの良い批評に加えて☆と△を用いた点数が付く。こうした情熱ある観客がいるとは、映画を製作したスタッフも幸せだ」。

「小説・評論」が散文の主流とされるが、その評者竹中忍が、映画論を評価した一文をまずもってきてくれたのを喜びたい。二〇世紀に台頭した機械を媒介して成立する映画とその評論は長い間、ある種の「第二芸術」として軽んぜられてきた。「中部」地方でも、その感じはのこっており、本格的映画論は出てこないし、ましてや映画同人誌なんてのは成立しにくかったろう。林は「第二芸術でよいではないか」と言いかねないが、私はやっと映画論や映画作家論が、「文芸」のど真ん中にも乗り込んでくる時代がやってきたように感じて「快」である。林はまごうかたなくその先陣の一人である。

むぎの部活動「えいが部」活動報告

保田與志彦　MuGicafe オーナー／むぎの部活動！「えいが部」部長

桑名市旧東海道沿いにある古民家カフェMuGicafe(むぎカフェ)では、毎週週末の金土のみ夜カフェを営業しております。その毎週金土曜日の１９時～２１時に、カフェの別室で「むぎの部活動！」という個性ある活動を開催しております。「どくしょ部」「間取り部」「おりがみ部」と個性的な部活動がある中で、第二土曜日の部活動が「えいが部」となっている訳です。

昨年５月　オンライン部活動の様子

ただ、コロナ禍の影響で２月度の部活動は休部となってしまいました。この先緊急事態宣言次第ではどうなるのかが心配ですが、コロナコロナと言っていても、何も始まりませんので、前に進むしかありません。昨年の５月に「緊急事態宣言」が出された際には、「むぎの部活動」初のオンライン開催が行われ、１０名ほどで映画を語り合う事ができました♪なかなか慣れないオンラインで、私は入れず遅れて参加＆バッテリーが無くなって自動的に早退となったという部長にはあり得ない失態をした思い出があります(笑)

こういった失敗も含めたオンラインの経験を活かして、今年1月には東京で大手広告会社で嵐とＣＭを作ったりしている友人がオンラインで参加してくれました。彼は、課題映画『２００１年宇宙の旅』の大ファンで、この映画について語り倒したいという執念がＺＯＯＭの画面を通じて伝わってきました。

今年１月　東京からオンライン参加の様子

二人で始まったこの「えいが部」が東京からの参加者も加わり、将来的には「海外からの参加」も見据えた幅広い活動になって行くのを夢見て、末永い活動にしていきたいと思っております。

どんどんいろんな事に挑戦していく「えいが部」でありたいです♪

編集後記

■東日本大震災から早くも１０年が経つ。で、見逃していた『風の電話』をＤＶＤで見る。被災者を真正面からとらえた作品で、他の震災関連映画の追随を許さない力作。終盤、孤児となった少女が「風の電話」と呼ばれる電話ボックスから、いまだに見つかっていない家族に向かって話しかける１０分のワンカットシーンは圧巻だった。（林）

■楽しみな時間を持てないと人は窒息しそうだ。コロナの中実感する。私はサッカー視聴とＤＶＤ映画、木工作業。どれも一人。時々人との関わりが恋しい。雑談、一杯飲む。身体にしみわたる恵みがないと枯れてしまいそう。

今年のヨーロッパサッカーで日本の若手数人がトップリーグで対等に戦っている。技術も高いがメンタル強度が２０才前半とは思えない。才能もさることながら、１０代から先を見据えて取り組んで来た賜物だろう。ユーチューブのダイジェスト版の解説者が面白い。サッカー戦は技と頭脳による予測と体力を瞬時かつ連続に攻守２２人がピッチで展開する。観る方は９０分まばたきも出来ない。映画鑑賞、木工作業も集中出来ることでリフレッシュしているのだろう。早く劇場で映画を堪能したいとつくづく思う巣篭り状態だ。（中村）

■新たにスタッフに参加させていただくことになりました西松優です。よろしくお願いします。小学生時代の東映時代劇に始まり、中学生時代に山田洋次監督、野村芳太郎監督の映画で目覚め、それ以来日本映画マニアです。映画は行き詰った時には勇気を、ストレスがたまった時には頭を空っぽに（ストレス解消）、笑いたい時には笑いを、そして大きな感動を与えてくれます。映画は〝人生の糧〟であり〝人生の師〟です。私はサラリーマン時代、『生きる』（黒澤明監督）を何度見たことでしょう。『東京物語』（小津安二郎監督）は、若い時は子の立場から、年を重ねてからは親の立場から、どちらから見ても素晴らしい作品でした。「よい映画を多くの人たちに観てほしい」というのが私の願いです。映画の好きな方々が多様なご意見を活発に誌上で発言できるように、スタッフと一緒に工夫し、また特集・テーマ等の切り口も考えていきたいと思います。（西松）

■コロナ禍により、生で音楽を聴く機会が激減した。映画も上映本数が減るなどの影響を受けたが、それでも1割～2割減というところ。ところが、ライブハウスはクラスターの温床になるということで、全く機能しなくなってしまった。クラシックのように、おとなしく椅子に座って聴くコンサートは、座席を一つおきにする対策等によって開かれるようになったけど、やっぱりそれだけでは寂しい。フロアで押し合いへし合いしながら踊って歌ってというライブが恋しい。

野球を観に行っても、応援は手拍手だけにして声は出さないようにと注意書きが。ビシエドのホームランに立ち上がって歓声をあげる（ドラゴンズファンです）というのが、野球観戦の醍醐味のはずだ。はい、分かってます、感染拡大を防がなきゃならないってのはね。早く収束しないかなー。（村上）

シネマ游人編集部

林　久登、中村藤生

西松　優、村上　暁

小誌、「シネマ游人基金」へのご協力ありがとうございました。編集部一同お礼申し上げます

【基金協賛者】　田中忍　木村直史　中島均　村上温　衣斐弘行　西松優

(敬称略)

「シネマ游人」基金とは

「シネマ游人」は、県内唯一の映画同人誌として、年２回(春、秋)の出版を続けています。映画に関する情報を幅広く取り入れ、硬軟併せ持つユニークな雑誌を目指しています。小誌の企画に協賛いただける方に、「シネマ游人基金」(一口５０００円、振込先は下記)を用意しております。ご協力をよろしくお願いします。

シネマ游人　ホームページ公開中

下記ホームページにて、過去に発行したシネマ游人の pdf ファイルを公開しています。ぜひご覧ください。

http://cinemayuto.web.fc2.com/

シネマ游人（ゆうと）　第 11 号

発行　：２０２１年４月２５日

発行者：シネマ游人代表　林　久登

TEL・FAX　059-326-1908

E-mail　cinema.yuuto@gmail.com

口座　：百五銀行富田駅前支店　普通 395911

シネマ游人 yokkaichi

編集責任者：村上　暁

頒価：３００円

印刷所：(有)ヤマダスピード製版